

潟 かた

語 がた

り

(三十九)

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

潟を撮り続けた写真屋さん その一

八坂神社前にある「こだま商会」。ご主人の児玉英逸さん(74)は羽立の生まれ。高校の時から本格的に写真を撮り始め、仙台で写真の修業をした後、二十歳の頃に帰郷。「写真屋さん」と呼ばれ、潟周辺のさまざまな写真を撮り続けてきました。

氷下漁の撮影をされていて、氷の穴に落ちてしまったことも。

父親が国鉄の土崎工機部に勤めてカメラを使う仕事もしていたものですから、子どもの頃から写真には興味があった。秋田市立高校(現在の秋田中央高校)に入ってから仲間と写真同好会を立ち上げて活動。同好会はその後、部に昇格されました。中央の木村伊兵衛さん、秋田では大野源二郎さんたちの写真に刺激を受けてあれこれ撮影していました。

高校卒業後は秋田市の「木内デパート」に就職。当時は写真関係の部署があり、本部は仙台にあったのですぐに仙台に移動。仙台で写真の仕事をしていましたが、親は天王に帰って来いと言うので、結局、二十歳の頃に会社を辞めて帰ってきました。

当時は潟の干拓がほぼ決定した頃で、なんとか失なわれゆく潟の姿を写真に残したいという気持ちが強くなり、仕事の合間にカメラを持って漁の様子や漁村風景などを撮影しまくりました。

あれは帰ってきて間もない頃、氷下漁を撮影していて網を入れる大きな穴に落ちたこともあった。漁師に「気をつけれよ」と



声をかけられたけど、カメラをのぞいていると夢中になって後ろなんか気にならない。「うん」と返事しながらバックしていたら、突然、ドボン。それでもカメラは手から離さなかった(笑)。自分の力で上がるうともがいたけど無理。その場にいた漁師が竹竿を差し出してくれ、なんとか引き上げてもらったけど、寒いなの。のって。「早く服脱げ!」といわれ、氷の上でスッポンポンになるまで服を脱ぎ、きつくしほってから、その服を再び着た。もう、ガクガク、ブルブル。もちろん、そのまま帰りました。残念ながらカメラもフィルムも使いものにならなくなってしまいました。これに懲りず、氷下漁にはその後も通いましたよ。